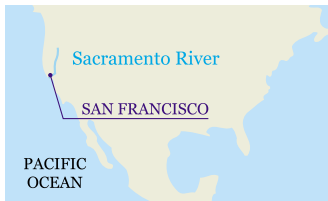


# 米国における河川の自然環境の復元とその現状

独立行政法人土木研究所自然共生研究センター長 萱場祐一



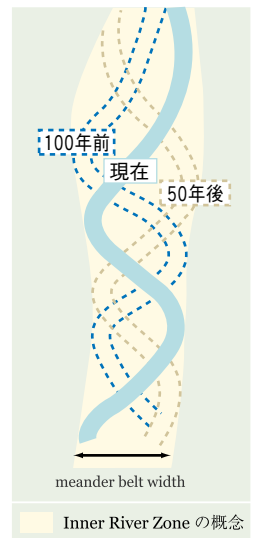
平成12年10月より1年間米国に滞在する機会に恵まれました。ドイツやオーストリアにおける河川の自然復元の情報は日本に入ってくるようですが、米国の実態はなかなか聞こえてこないのが実情です。そこで、私が滞在中に見て廻った復元事例を一つご紹介いたします。

紹介するのはサクラメント川本川で氾濫原(出水時に冠水するような場所)の復元を対象とした事例です。米国でも広範に活動しているNPO、The Nature Conservancy(ネイチャー・コンサーバンシー)が母体となり実施している延長228マイルにも及ぶ広大な事業です。氾濫原の土地の購入、氾濫原に依存する樹木の植栽といった単純な手法と、低水路の移動を許容し侵食と堆積によって維持されている氾濫原の動的システムの復元も試みていました。これは過去100年間に移動した低水路の範囲と今後50年に移動すると見込まれる低水路の範囲の双方を包含するゾーンを、Inner River Zone(インナーリバーゾーン)と定義し、このゾーン内に生育する河畔林を、侵食による生育地の破壊と堆積に

よる生育地の再生によりバランスさせる、すなわちサクラメント川の河畔林の維持に必要な動的システムを保全しようとするものです。

それほど河床勾配が大きくありませんから、生育地の再生から破壊に至る時間は非常に長いと考えられます。たぶん、数十年はかかるのではないのでしょうか。つまり、評価にはこの程度の年月が必要なわけですから、かなり気の長い事業と言えます。

日本でも近年扇状地河川における河原の動的システムが破壊され、河原と河原固有の動植物の減少が報告されています。扇状地河川は河床勾配が大きく、河原の再生から破壊に至る時間は相対的に短いという違いはありますが、今後動的システムの復元を考える際には大いに参考になる事例だと思いました。サクラメントから車で2時間程度ですから機会があったら皆さんも是非訪問してみてください。



特集の内容についてさらに身近に体験してもらるように、関連施設の展示を紹介します。

## 展示見聞録

## 目黒寄生虫館

寄生虫の生活史を標本と合わせて理解できる!

「1,2階・展示室」

東京都目黒区に世界でもただ一つの寄生虫の博物館「目黒寄生虫館」があります。1階と2階が展示室、3階から上の階は研究室や資料室になっています。

寄生虫とは何か? 1階では寄生虫の基本的な概念を中心に紹介。2階からは各論に入り、拡大ろう模型、標本、資料、解説パネルによって、様々な寄生虫の生活史や人との関わりが紹介されています。

館内には標本がずらりと陳列され、全部で約300点にもなるそうです。やはり展示の目玉となっているのは8.8mのサナダムシ。他にもカメの目に寄生したウミエラビルの標本も印象的で注目を集めているようです。

研究員の荒木潤さんのお話では、「ここでは多くの標本を陳列して紹介するとともに、パネルを使って図と実物を対応させて、わかりやすく解説するように心掛けています。」とのこと。実際にパネルの文章はわかりやすい用語で短くまとめられ、イラストや写真の使い方も理解を促すための工夫が見られました。

年に1回、特別展が開催され、去年は「パラサイト・カップル」と題して、フタゴムシ等、2匹がくっついた奇妙な寄生虫の仲間が紹介されました。また、夏休みには小学校高学年から中学生を対象に、身近な寄生虫を調べる魚の解剖等の体験プログラム等も行われているそうです。

寄生虫は人の生活に直接あるいは間接的に関わるテーマとして人々の関心も高く、取材した日にも多くの人が訪れてい

ました。最初は気持ち悪がったり怖がったりしていた見学者も、展示を観覧しているうちに寄生虫の不思議な世界に引き込まれ、無言になってじっと標本や写真に見入っていました。多くの標本に加え、見学者の表情や態度の変容もこの館の見どころの一つと言えるのかもしれません。

[吉富友恭(土木研究所 水循環研究グループ 河川生態チーム)]



8.8mのサナダムシ。1Fフロアで寄生虫の概念を説明。



ずらりと陳列された標本。

寄生虫の生活史を標本と対応させて紹介。